

覇権交代 1

韓国参戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	11
第一章 同盟崩壊	22
第二章 サプライズ	39
第三章 不穏な気配	69
第四章 督戦隊	95
第五章 オン・ザ・ビーチ	121
第六章 パイプライン	148
第七章 上陸用舟艇	175
第八章 玄武ミサイル	202
エピローグ	226

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易されている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずのともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引く張られる。コードネーム：マカルー。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

み どう そう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：
ボーンズ。

かわにし まきふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

おだぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびる あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：
ム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉
の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WaiR)〉

しばひかる
司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育
に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〈水陸機動団〉

うえぞのひろま
上園広樹 陸将補。水陸機動団長。

はかまだてるお
袴田輝男 一佐。水陸機動団幕僚長。

むなかたしん
宗像晋 二佐。第一水陸機動連隊第二中隊長。

いわながほまれ
岩永誉 一尉。第一水陸機動連隊第二中隊第一小隊を率いる。

たつむらしげと
達村茂人 曹長。岩永誉一尉の女房役。

さかさばらけいすけ
榊原啓介 三曹。地元は九州。

〈第一ヘリコプター団〉

むらたもりと
村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ
村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや
高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやとしお
染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかねと
板東兼人 一佐。`かが、艦長。

かおさか
兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら みさ
藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36 Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ごみいよ み
五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

えがわとしき
江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ
竹内幸輔 一佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦「ほうしょう」〕

いづみ だ せん せい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐらはじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あすか
宮城明日香 一尉。気象班長。

〈航空自衛隊〉

(二〇二飛行隊)

むらた きたと
村田先斗 二佐。F-35 Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

//// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 國務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートの上司。

アマンダ・マクノート 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

(第三海兵遠征軍)

ウェイン・R・ヴァンペルト 中將。第三海兵遠征軍司令官。海南島攻略作戦の指揮をとる。

グレン・ギャレス 少将。参謀長。

キャスリーン・アイザック 中佐。航空参謀。F-35Bのパイロット。

(第三海兵師団第三偵察大隊B中隊)

アルベルト・タイラー 中尉。第三海兵師団第三偵察大隊B中隊
フォース・リーコン
武装偵察隊を指揮。

エイベル・リンカーン 曹長。アルベルト・タイラーの中尉の女房役。

グレイグ・フィリップス 伍長。

中国

《中央弁公庁》

ファンシェンホマオ
範学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〈陸軍〉

(海南島独立守備隊)

マオアイチュン
毛愛軍 少将。海南島独立守備隊を率いる。出世や賄賂とは無縁な
軍人生活を送ってきた、ゲリラ戦研究の第一人者。

ホアンクアンイン
黄冠英 大佐。作戦参謀。

(第五技術情報大隊)

ワンシュエビン
万学兵 大佐。優秀な分析官で、英語講座を持つほどのインテリ。
一年前、瀋陽で暮らしていた一人娘が交通事故で死亡している。

(第22連隊)

チエンホンダ
銭宏大 中佐。第22連隊政治将校団副隊長。

ホウワイエ
侯燁 少佐。銭の部下。

大韓民国

《国家情報院》

リュジンニ
柳珍熙 副長官。

チジュンニル
池俊烈 中佐。副理事官。

〈空軍〉

(第11戦闘航空団)

ソンキョンテ
孫庚泰 少将。航空団を指揮する。

オキョンジュ
吳京周 中佐。第112戦闘飛行隊を率いる。

ピョンガンミン
辺光敏 少佐。飛行隊の副隊長。

〈海軍〉

キムジンイル

金真一 少将。韓米同盟艦隊司令官。

〈海兵隊〉

ソンジュウオン

孫周原 少将。海兵隊部隊を率いる。

クンヒヨサン

斤孝相 大佐。

パクミンテ

白珉台 中佐。第二三四海兵予備役中隊を率いる。元は韓国最大の軍事顧問会社の中東派遣部隊を率いていた。

チヨンデウン

鄭大恩 少佐。副隊長。

(第二海兵師団)

ユンベクヨン

尹白龍 大佐。第二海兵師団第二戦車大隊を率いる。

霸權交代 1

韓国参戦

プロローグ

キョンサンプクト
慶尚北道大邱・韓国空軍第11戦闘航空団基地

。 F-15Kスラム・イーグル戦闘機で編成される第112戦闘飛行隊のブリーフィング・ルームでは、サムソンの50インチ・テレビ・モニターが大統領の短い声明を繰り返し流していた。それは、ほんの一五秒にも満たない声明だった。

「米韓軍事同盟を破棄する。米軍人と軍属、及びその家族は、四八時間以内に韓国領土内からの平和的退去を求める」

そのたった二行程度のものを、テレビでは全局が解説無しで繰り返し報じている。その場に集う

全員が、呆然としてその画面に見入っていた。

パイロットも整備兵も、いよいよ中国と事を構えるのだと覚悟を決めて、不眠不休で準備していた。だが、大統領府が下した決断は、最前線の兵士たちにとって全く想定外なものだった。もちろん、その最悪の事態を察知して備えている者たちの中にはいたが。

その時、ブリーフィング・ルームで乾いた銃声が響き渡る。その場にいた全員が「え？」という反応を示した。

第1海兵師団第2海兵連隊偵察隊を率いる崔基泰^{チエギ}中士（軍曹）は、右手にK5ピストルを掲げる

と「文句がある奴は、後で部隊長に申し出る！」と叫び、自らが率いてきた海兵隊隊員を睨みつけた。

この場にいる海兵隊員全員が武装していたが、銃口を下げたまま誰も銃を構えようとはしない。「朴は国家情報院のスパイで、指揮系統を無視して俺たちを監視していた。こいつはただの裏切り者だ」

その反応を見て、崔はようやくピストルをホルスターに戻す。床に倒れた兵士のこめかみからは、まだ血が流れ続けていた。

第112戦闘飛行隊を率いる呉京周中佐が「血を拭え」と、崔にタオルを投げた。

「すまん、京周」と、崔はそのタオルで頬に飛び散った部下の血を拭う。それを見た呉は「で、どうするんだ？」と、幼なじみの崔に聞いてきた。「……俺に聞くなよ。そっちの決断に乗ったんだ

からな」

その瞬間、外から発砲音が響いてきた。ゲート付近での銃声だ。おそらく、味方同士で撃ち合っているのだろう。

「俺らは飛ぶのが商売だ。地上で撃ち合いになったら空軍に勝ち目はないぞ」

「心配はいらん。この基地を制圧できるような兵力は出してないし、まあ一応、命令に従ったふりをしてるだけだ。お前たちが脱出するまでの時間は稼ぐさ」

すぐ傍には、米空軍から派遣されている連絡将校のクロエ・R・ワグナー大尉もいたが、今起こっている事態に絶句し、青ざめた表情で立ち竦んだままだ。

航空団を指揮する孫庚泰少将が現れたところで、全員が立ち上がって敬礼した。將軍は床の死体を一瞥すると、「問題でも？」と呉中佐に質す。

「いえ。海兵隊の問題です」そう中佐が応じた。

將軍は、テレビのポリウムを落とすよう命じると、両手を腰に宛がい、全員の顔を確認してから口を開く。まず、米空軍のワグナー大尉に對してだった。

「大丈夫かね、大尉？」

「はい、將軍。いささか驚いてはいますが……」

「迷惑をかける。さて、諸君！ 状況は皆知る通りで、われわれは困ったことになった。米軍に出で行けということは、韓国はこれから中国と同盟を組み、日米と戦うということだ。もちろん、われわれは受け入れる気は無い。最前線に立たされるのは、われら空軍であり、われわれのスラム・イーグルだからな。心配は無用だ。われわれは、今日の大統領府の暴挙を予想し、綿密な作戦を立ててきた。〈エクソダスBプラン〉と名づけられた作戦だ。主力部隊を、速やかに大統領府の影響

力が及ばない場所までいったん退避させる計画である。当然、大統領府はそのような作戦が全国の一線部隊にあることを知っていて、事前に海兵隊を送り込んできたわけだが——幸いこの基地では、海兵隊を味方につけることができた。崔軍曹の決断に、感謝する」

崔は、軽く一礼した。

「それで、われわれがやるべきことは単純だ。一機でも多くのスラム・イーグルを速やかに離陸させ、日本の基地へと脱出させる。燃料は、日本の基地に着くまでの分だけで構わない。各編隊のフライト・プランはすでに作成済みだ。天候も問題無し。味方を欺くために複数のルートで陸上を飛び、複数の場所から洋上へと抜ける。レーダー警戒部隊の協力も得ているが、万一はある。背中から撃たれることにも警戒してくれ。基地の電話は封鎖されている。家族を置いていくことになるが、

基地はそう遠からず米空軍に爆撃されるだろう。その前に、基地周辺に暮らす家族を退避させる手筈も整えている」

ここで携帯が鳴り、崔は部屋の後ろへと下がった。飛行隊の副隊長・辺光敏少佐ヒョンガンミンが右手を挙げ、「これは、飛行隊長も加わった謀議ですか？」と上官に質している。

「そうだ。黙っていてすまん。君が残りたいというなら引きとめないが」

「いえ、そういうことではなく、自分らは初耳なので、いくつか疑問点があるのです」

「いいぞ、何でも聞け」

「ありがとうございます。まずこれは、全部隊で脱出するわけではないのですね？」

「そうだ。できればそうしたいが、それは諦めた。事前準備の情報漏洩を防ぐために、脱出部隊を絞るしかなかった。そのため残る部隊もいる。飛行

隊単位の独断専行を装うためでもあるが」

「海軍部隊も洋上に展開していますが、彼らは見逃してくれるでしょうか」

「いや、彼らには何の話もしていない。だが、海軍は中国との戦争に備えて西海寄りに布陣していた。何隻かは展開しているだろうが、念のため洋上すれすれを飛ぶことになる」

「最後の質問です。日本側は、われわれを受け入れてくれるのですか？」

「個人的なツテを辿って、これから電話することになる。まあ、電話をかけまくるしかないだろうな。どこかの地方自治体の窓口でも警察でも構わないから、撃たずに迎えてくれるように頼むよ。そこは心配するな。空軍同士の信頼関係があると信じている」

「……仮に、われわれが安全に脱出できたとしても、ここには当然中国軍がやってくるわけですよ

ね」

「もし更地にならずに済むようなら、そうなるだろうな。それも占領部隊の指揮官は中国人だが、兵は北の特殊部隊かもしれん。中国と同盟を組むと言うことは、そういうことだ。そういう事態に備えるためにも、米軍はここを爆撃するだろう。ここに戦闘機がいようがいまいがな。私はその事態に備えて基地に残り、必要な手立てを取る。ペーパー一枚、燃料一滴、敵に渡す気はない」

「それを聞いて、安心しました」

ここで携帯を切った崔は呉中佐に近づくと、「海兵一個中隊が向かっていているぞうだ。時間はないぞ」と耳打ちをした。

「……わかった。燃料給油車を動かしたのがまずかったか。急ごう！」

呉中佐は、少将に目配せをしながら最後にこう締め括った。

「話は以上だ、諸君。追って整備部隊も必ず脱出させる。君らは、アメリカの誘導爆弾を抱いて、同胞の真上にそれを落とす任務を強いられるかもしれない。だが、躊躇うな！ われわれは自由主義陣営の一員だ。決して、共產主義者などとは組まない。それを肝に銘じよ！ 諸君らの健闘を祈る。無事に日本に辿り着け——」

「さあ、名前を呼ばれたパイロットは少将の前に歩み出て、フライト・プランを受け取れ！」

早々に呉中佐が命じた。パイロットが二名ずつ前に出て、少将から直接フライト・プランを手にとった。

そのペーパーを捲った皆の顔に驚きが広がる。各機搭載燃料からウェイポイント、そこへの到達時刻まで詳細に書き込まれていたのだ。着陸が見込まれる、西日本の自衛隊基地の滑走路情報まで入っている。まるで自分で作成したかのような完

壁なフライト・プランだった。こんなものまで用意されていたなんてと、驚愕の声も上がる。

その後、一人一人が少将と敬礼を交わしてエプロンへと走っていった。

「さて、ワグナー大尉。君は、ここにいと政府の人質戦略に利用されるおそれがある。もし中国軍が乗り込んできたら、捕虜扱いになるな。呉中佐の後席士官として乗ってくれ。君は、われわれの切り札でもある。日本側がわれわれの受け入れを逡巡^{しゅんじゆん}しても、君が無線に出れば、米軍人を受け入れないわけにはいかないからな」

「ご配慮いただき、ありがとうございます」

「本国のご家族には、日本から電話を入れたまえ。君がまた、この基地に帰ってこられることを祈っているよ。政府は滅茶苦茶だが、韓国人の心は常にアメリカと共にあると伝えてくれ。あらゆる人々にな」

「はい、必ず。皆様の無事を祈っています」

大尉が敬礼し、自分の航空ヘルメットを取って走っていった。彼女も、もともとストライク・イーグルのパイロットだ。

「では将軍も、ご武運を。整備兵の脱出をよろしくお願いします」

この場に残っていた呉中佐が敬礼する。

「ああ、大脱出^{エクスツダス}というほど、完璧な作戦ではないがな」

「もし大統領府が勝つたら、どうしましょうか」

「考えたくはないが、君らはどこかに亡命政府でも樹立したまえ。生きていければ、私も脱出して仲間に加わる。さあ行け！」

その言葉を受け、呉中佐もパラシュートを背負ってエプロンへと向かう。すでに外の銃声は止んでいた。

崔が「空軍はいいよなあ。いつでも逃げ出せる

「……」とぼやいている。

「お前は どうするんだ？ 反逆罪だぞ」

「どうしたものか……。お前は知っているだろう、俺の性格。後先を考えないってな。部下を射殺したんだ、ただじゃすまんだろう。どこかで反乱軍が結成されるだろうから、俺は仲間を募ってそれにも加わるさ。中国人のケツを舐めて暮らすなんて真つ平だ。じゃあ、達者でな」

「ああ、お前も。もし機会があったら、お袋を訪ねてくれないか？ 親父が死んでからめつきり老け込んでな、たぶん心配するだろうから」

「心配するな。奥さんも、うちの女房と一緒にどこかに避難させるよ。青瓦台チョンワッデに爆弾を喰らわせてやれよな！」

スラム・イーグルが次々と離陸していった。整備兵たちが、手を振ってそれを見送っている。

とんでもない状況になったと思いが、呉中

佐はここから見える三六〇度の景色を見渡した。

これが、この基地の無事な姿を見る最後かもしれない。なかつたからだ。

上空へ上がったスラム・イーグルは、友軍を欺くためにいったん北東へのルートをとった。

山岳地帯の溪谷地帯沿いに、高度を抑えて飛ぶ沿岸部のレーダー・サイトは、内陸部を飛ば味方には注意を払っていない。しかもそれが整然と編隊を組んでいけばなおさらだ。

レーダーも敵味方識別装置も作動している。普段と違うのは、フライト・プランが管制側のシステム上に登録されていないことだけだ。だが、それも珍しいことではない。スクランブルではフライト・プランは間に合わないし、極秘任務の可能性もある。

手渡されたフライト・プランには、レーダーサ

イトから照会された時の模範解答まで用意してあったが、幸い、それらの基地にも仲間がいてくれたらしく、何事も起きなかった。

各編隊は、ウェイポイントを通過することになったんだんと集まってきた。洋上に出る時には四機編隊が集まり、領空を出てさらに五〇キロ飛んだところで、飛行隊の一六機が集まった。

この短時間で、これだけの機数を発進させられたのは奇跡だ。しかも、フル装備での出撃で。誘導爆弾から空対空ミサイル、増槽も各一本装備していた。

だが燃料は、日本列島のどこかの基地に着陸する分しか搭載されていない。このまま東へ真っ直ぐ飛んで石川県の航空自衛隊基地に向かうのが最良だが、それだと燃料がぎりぎりになるし、そもそも基地に降ろしてもらえないかもわからない。こちらは誘導爆弾を搭載しているのだ。

フライト・プランでは、二〇〇キロ洋上へ出た後に南へ針路をとり、航空自衛隊機のスクランブル発進を受けて福岡県のどこかの滑走路に降ろしてもらうことが想定されていた。

隠岐諸島沖一三〇キロまで南下したところで、航空自衛隊のF-15J戦闘機二機がレーダーに映る。

すでに日本側の防空識別圏に入っている。イーグル戦闘機は、いったんこちらの編隊をオーバーシュートすると、東側後方からじりじりと追いつけてきた。まだ視界には入らない。自分たちよりやや低い高度を飛んで、目視を避けている様子だ。さらに、後続のスクランブル機二機がレーダーに映る。

すると突然、編隊の先頭を飛んでいた呉中佐の左真横に、航空自衛隊機が上がってきた。まだ双方の距離はある。二〇〇メートルほどは離れてい

るが、徐々に幅寄せしてきた。

呉中佐は、編隊に「コースそのまま、不審な動きは慎め」と命ずると、国際周波数に切り替えて英語で話しかけた。

「こちらは韓国空軍、第112戦闘飛行隊長の呉京周中佐である。敵意はない。繰り返す、交戦の意図はない。われわれは、国内情勢の激変により国を脱出してきた。日本側に、政治亡命を求める。

本機には、ともに基地を脱出したアメリカ空軍の高級将校が座乗している。合わせて保護を願いたい」

自衛隊機がさらに幅寄せしてきた。その時、後席に乗るクロエ・R・ワグナー大尉が酸素マスクを外した上でヘルメットのバイザーを上げて、さらにヘルメットに隠れたブロンドの髪を少し見せた。

「大尉、微笑んで見せたかね？」

「それは必要なことでしょうか」

「性差別だと非難してほしくないが、さすがにこういう時には、いわゆる『女の武器』ってやつも使ってもらうしかない」

「了解しました」

相手の顔が見えるまで接近すると、ワグナー大尉は右手を振りながらにっこりと微笑んで見せたようだ。

相手は三〇秒ほど経ってから、ようやくその仕事に反応し、右手を振り返ってきた。

「呉中佐——。こちらは、築城ついき基地に展開中の航空自衛隊第二〇三飛行隊長・本居もとむら宏和ひろかず二佐です。

確か昨年、コロラドスプリングスで開かれた米空軍のセミナーで一緒にしました。奥様秘伝のチゲ鍋の作り方を教わった。困難な状況に置かれたことに同情します。日本政府は、貴部隊を快く受け入れ、歓迎します！ひとまず築城基地へ誘導し

ますので、われわれについてきてください」

自衛隊機が翼を大きく上下に振るのがわかった。呉中佐もそれに応じながら左手を上げて振る。

「ありがとう、モトオリ中佐！ 全機、貴官の指示に従い、築城へと向かいます」

「燃料は大丈夫ですか？ うちの給油機は、あいにく出払っていて……」

「築城までなら、問題ありません」

「了解。では、フォロミー！」

驚きだった。爆装した戦闘爆撃機を自衛隊基地に招き入れてくれるなんて！

きつと、板付かどこかの民間空港に誘導されるものとはかり思っていた。だが、彼らがわれわれを歓迎してくれるのはほんの一瞬だろう。おそらく明日には、海峡を挟んだ釜山と博多で、厳しいにらみ合いがはじまるはずだ。

双方が戦闘機を繰り出し、撃墜し合うことにな

る。もちろん、われわれもそれに参加し、同胞と撃ち合う事態も覚悟せねばならない。

不幸なボタンの掛け違いからはじまった米中の戦争は、南シナ海での日米東南アジア連合海軍と中国軍の戦闘に発展した。

中国側は、極秘裏にホノルルに地上軍を奇襲上陸させ、占領作戦を開始。対するアメリカは、その報復に海南島へと海兵隊を上陸させた。

ステルス戦闘機同士の大規模な殴り合いに、一〇〇〇機にも及ぶドローン部隊の沖縄襲撃を経て、ハワイ攻略部隊は降伏投降した。

ホノルルの平和を回復し、香港での独立運動まで画策した米側は、これで中国も和平交渉に応じるだろうと目論んだが、中国はまた違うカードを切ってきた。

それが、韓国だった。

米中の激突からは距離を置き、どっちつかずな態度をとり続けていた韓国を味方につけて、北京ペキンは優位に立とうとしたのだ。

ホノルル奪還でようやくこの戦争も終わると思っていた日米は、激しい徒労感に見舞われていた。

第一章 同盟崩壊

独島級強襲揚陸艦二番艦マ馬羅島ラド（一九三〇〇トン）を旗艦とする韓国海軍艦隊は、イージス艦を含めた六隻編成で南シナ海東沙諸島沖を南下中だった。

台湾の高雄カオシヨンから五〇〇キロ、香港ホンゴンからは三〇〇キロほどである。艦隊は秘密裏に釜山を出航し、無線封止のままここまで来た。もちろん日米両部隊の庇護下で行動している。順調にいけば、夜半にはアメリカ海兵隊とともに、海南島攻略戦に参加する作戦になっていた。

ただし韓国軍の参加は、しばらくは国民には秘匿ヒクされる。報じられることもなかったし、米海軍

にもその艦隊の存在が同盟国を含むネットワークにのることはなかった。

しかし、バシー海峡を通過して大陸へ近づく頃には、日米両軍のエア・カバールが提供されることになっていた。

大統領の緊急声明が出る一五分前、揚陸艦艦内にいた海兵隊は一斉に行動を起こし、機関部、ブリッジ、武器庫等を占拠した。

理由を問う韓米同盟艦隊司令官の金真一少将キムジンイルに対し、海兵隊部隊を率いてきた孫周原少将ソンジュウオンは「しばらく待ってくれ」と応じて、双方の上級幹部を士官室に集めた。海兵隊側の将校達も、全員が事

情を報されていたわけではないらしく、皆困惑している様子だ。

ただし、海兵隊側の士官は全員戦闘服姿で、腰にピストルを下げている。

やがて、衛星テレビで大統領の短い声明が流れ始める。皆、言葉もなかったようだ。呆然と、その演説を聞いている。

「……君は、いつ知ったんだね」

我に返った金少将は、真向かいに座る孫に問いかけた。

「解放軍が、ホノルルに上陸した頃だ。損な役回りだな……。私が望んだわけじゃない」

孫は慥然とした態度で言う。好き好んで命令に従っているわけではないという顔だ。

「なぜ、こんな無茶なことを？」

「私に聞かないでくれ。もううんざりだ。アメリカは終わった。これからは、中国の時代だ。だか

ら、韓国は誰より先に勝つ側につくんだそうだ」

「そんな話を真に受けたのか?! これは、国家反逆罪だぞ！」

「最高指揮官は大統領だ。指揮系統の末端にすぎない自分ごときに、あれこれ言える話じゃない。私は命令を遂行する。それだけだ。海軍も従ってほしい」

「海兵隊は正気なのか」

「正気も何も、そういう命令なのだ。じゃあ、どうしろと言うんだ？ クーデターを起こせと!! まあ、私がそれに期待しなかったといえは嘘になるがね。陸軍は、決起しなかった」

「海軍は受け入れられないぞ。そもそもわれわれは今、日米の合同軍に囲まれている。たちまちミサイルが飛んでくる」

「ああ、そうだったな……。艦隊の針路を、ただちに大陸寄りにとってくれ。中国軍の勢力圏内に

入り、大陸沿岸沿いに南下する。その後は海南島へ上陸し、敵と対峙する。実は、昨日からすでにうちのフォース・リーコンが上陸、潜入している。米海兵隊と交戦するのは、時間の問題だろう。とにかく、このまま米海軍の勢力圏内に留まり続けるのはマズいな」

「米海軍に投降し、政治亡命を願ひ出ることもできる」

「それどうなる？ 国を分裂させるだけだ。朝鮮は、昔から中国と日本の板挟みで揺れ動いていた。この七〇年、われわれはアメリカ寄りできたが、その振り子が本来あるべき場所に戻るだけだ」

「中国の軍門に下るといふことは、北と同盟関係を結ぶということだぞ」

「そうかもしれんが、北の軍事力なんぞ、最早気にする必要も無いだろう。連中には核とミサイル

しかないんだからな。大統領府の説明はこうだ。

——アメリカの市場を失つても、われわれは中国の一三億もの市場を独占できる。日本車を排除し、韓国車を売りまくるし、もちろん、兵器もそうだ。国産兵器が世界一だと言う気はないが、中国の豊富な資本で開発した武器を世界中に売りまくる。

海軍だって、おこぼれに与えられるんだ。本格空母ももてるし、もちろん、われわれの優れた造船技術で中国海軍の艦艇を一新することになる。ここにいる幹部諸君らは、引退後は中国海軍に招かれ、西側の最新の海軍戦略を教えることになるだろう。アメリカの市場は、たかだか三億。今は気前は良いが、経済力は明らかに下降線を辿っている。中国と組めばロシアもついてくるし、ヨーロッパはアジアの揉め事もめごとに関心は無い。せいぜいイギリスがアメリカに付き合つて、形ばかりの経済制裁に加わるだけだ。この戦争は、はじまった時にはも

う詰んでいた。日米は戦場では勝利し続けたが、戦争では負けている。韓国が中国に味方することで、アメリカは白旗を掲げるだろう。そう大統領府は見ているようだな」

「まさか……」

「ああ、私もそんなにうまい話にはならんと思う。だが、あとはアメリカの面子をどう立てて戦争を終わらせるかだけだ。対外的には、中国が負けただけでも構いはしない。われわれは取るものを取れば、それでいい。それは、市場なのだ」

「その前に、アメリカが韓国全土を焼け野原にするぞ」

「それはどうかな。アメリカは倫理に足を引っ張られるし、現実問題として、中国と戦争している最中に、裏切った国に懲罰ちやうばつを下すような余裕があるとは思えない。せいぜい、象徴的な軍事基地が攻撃される程度だろう。いくら裏切りが許せな

いからといって、われわれへの攻撃を優先したら驚きだ。これも、駆け引きというやつだろう」

「君が指揮官や大統領だったら、こんな馬鹿げた選択をするか？ 明らかに敵味方を見誤っているじゃないか」

「幸い、私は海兵隊最高司令官でも大統領でもない。階級章の星がもう一つくらい増えたらそういう判断もするだろうが、われわれが、これは間違っているかと抗弁してどうなるものでもないだろう。考えてもみてくれ、たとえばわれわれがこのままアメリカに亡命したとする。国内に残った者たちによって現政権が打倒されれば、われわれはいずれ無事に帰れるのかもしれない。ただし、それはアメリカが勝った場合に限る。現政権が生き残り更に中国が勝てば、帰る国はなくなるのだ。逆に大統領府の命令に従い、中国とともにアメリカと戦った場合は、もし負けたとしても、われわれが

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。